

読み物教材

郷土の先人 Ver. 4

こころ  
かごしまの心  
きょう せんじん  
～今日，どの先人？～

小学校  
1・2 年



「あなたの おし は だれですか？」



鹿児島県教育委員会

# もくじ

「主題名」

「教材名」

「登場する人物」

1 「かんしゃの 気もち」 — 「わたしたちの 家ぞく」 …………… 1

【上白石 萌音・上白石 萌歌】

2 「ちがっていても なかよく」 — 「ママが 教えてくれたこと」 …… 6

【AI】

3 「みんなの ために」 — 「利右衛門さんの からいも」 …… 10

【前田 利右衛門】

4 「あい手の 気もちを 考えて」——「たすけられた さいごうさん」…15

【西郷 隆盛・土持 政照】

5 「くじけない 心で」——「くるしさを のりこえて」……20

【鶴田 義行】

6 「ふるさとを 思う 気もち」——「人を 思い ふるさとを 思う」…25

【八島 太郎】

### じどうの みなさんへ

この本は、かごしまと かかわりのある 人たちの お話が のっています。どのお話も その人が かごしまで すごしながら 思ったことや 考えたことが 書かれています。このお話から 考えたことなどを 自分の 生かすに 生かして みましよう。

※ じゆぎよう いがいでも 読んでみたい 人の 話が あったら 読んでみましよう。

※ この本の ほかに かごしまと かかわりのある 人たちの お話をのせた本に 「郷土の先人」・「続・郷土の先人『不屈の心』」・「ふるさと心」があります。学校においてあったり、かごしまけんきょういくいんかい 鹿児島県教育委員会の ホームページに のっていたりするので 読んでみましよう。

# 1

かんしゃの 気もち

## わたしたちの 家ぞく

うつくしい 歌声と えんぎで、かんきやくを お中に  
させる 二人の しまいが います。その二人の 名前は、  
あねの 上白石萌音さんと いもうとの 上白石萌歌さんです。  
みなさんの 中には テレビなどで 見たことが ある人も  
いるかも しれません。

二人は かごしまで 生まれそだち、今では はいゆうや  
歌手の しごとをして 活やくしています。これから そんな  
二人の ことについて 話を します。  
二人が 子どもの ころの ことです。



萌音<sup>もね</sup>さんは、とても 元気<sup>げんき</sup>で いろいろなことに きょうみを  
もって すごして いました。はじめて 会<sup>あ</sup>う人<sup>ひと</sup>にも すすんで  
あいさつをして すぐに なかよくなることが できました。

萌歌<sup>もか</sup>さんは、きれいな 空<sup>そら</sup>を ながめたり、すきなことに  
お中<sup>ちゅう</sup>に なって 一人<sup>ひとり</sup>で あそんだりすることが すきでした。

二人<sup>ふたり</sup>は、お父<sup>とう</sup>さんや お母<sup>かあ</sup>さんから 「人<sup>ひと</sup>の 目<sup>め</sup>を 見<sup>み</sup>て  
話<sup>はな</sup>しなさい。」人<sup>ひと</sup>に 会<sup>あ</sup>ったときは、この人<sup>ひと</sup>に ありがとうって  
言<sup>い</sup>えることは なかったかなと 思<sup>おも</sup>いかえして 考<sup>かん</sup>えなさい。」

「考<sup>かん</sup>えないで ものを 言<sup>い</sup>っては いけないよ。」  
などと よく 言<sup>い</sup>われて いました。だから、

二人<sup>ふたり</sup>は、「お父<sup>とう</sup>さんや お母<sup>かあ</sup>さんのことを

きびしい。」と 思<sup>おも</sup>って いました。

二人<sup>ふたり</sup>は 大<sup>おお</sup>きくなり、萌音<sup>もね</sup>さんは



大学<sup>だいがく</sup>じゅけんの べんきょうが うまういかず  
気<sup>き</sup>もちが おちこんでいた 時<sup>とき</sup>が ありました。

その時<sup>とき</sup> お父<sup>とう</sup>さんとお母<sup>かあ</sup>さんから

「一生<sup>いっしょう</sup>けんめい やった けっか たどりついた

場<sup>ば</sup>しょが 一<sup>いち</sup>ばん いい場<sup>ば</sup>しょだよ。」

と 言<sup>い</sup>われました。お父<sup>とう</sup>さんとお母<sup>かあ</sup>さんの この ことばを

きっかけに 萌<sup>も</sup>音<sup>ね</sup>さんは「うまく いかなくなったこと、つらくて

しょうがなかった ことは なによりの エネ<sup>え</sup>ルギー<sup>ねるぎ</sup>になり、

しっぱいも たからものになる。」と 考<sup>かん</sup>えることが

できるようになりました。

萌<sup>も</sup>歌<sup>か</sup>さんも、十<sup>じゅう</sup>八<sup>はち</sup>才<sup>さい</sup>の時<sup>とき</sup>、はいゆうの しごとを していて

自分<sup>じぶん</sup>の 力<sup>ちから</sup>が 足<sup>た</sup>りないと おちこんでいた ことが

ありました。その時<sup>とき</sup> お父<sup>とう</sup>さんとお母<sup>かあ</sup>さんから、



「どの おしごとも 大へんだから 自分だけが 大へんだと  
思わないほうが いいよ。はたらくことは いたみが あったり  
つらい思いを したりすることも あるから 自分で  
えらんだ道に せきにんを もって やりなさい。」

と 言われました。お父さんとお母さんの ことばを  
きっかけに 萌歌さんは、「自分だけが 大へんでは ないんだ。  
自分を ささえてくれる 人たちも くるしいことが あるから、  
自分も がんばろう。」と 考えることが できるようにな  
りました。

萌音さんと 萌歌さんは、きびしく しかってくれたり、  
たくさんの ことを 教えてくれたりした お父さんや  
お母さんの ことばを 今も 大切に しています。そのことばは、  
二人が きんちょうしたり ふあんになったりした 時に

ゆう気を<sup>き</sup> くれるものになっ<sup>ふ</sup>ています。二人は、お父さんや  
お母さん<sup>かあ</sup>のことを 思<sup>おも</sup>うと、「ありがとう。」という 気持<sup>きもち</sup>ちで  
心<sup>こころ</sup>が いっぱいにな<sup>な</sup>ります。





## 2

ちがっていても なかよく

### ママが 教えてくれたこと



AIさんが書いた  
「ハピネス」のかし

このかしを 書いたAIさんは、中学生まで  
かごしまけんで すごしました。

お母さんは アメリカ しゅっしんで、  
AIさんも アメリカで すごした ことが

ありました。

このお話は、AIさんが 子どもの ときの  
お話です。

アンティー。これは、日本語で「おば」という いみです。

わたしには、たくさんの アンティーが います。はだの 色が  
ちがう アンティー。生まれた国が ちがう アンティー。  
出会って すこししか たっていない アンティー。でも

※おば・・・お父さんや お母さんの 姉妹にあたる しんせき

みんな 友<sup>とも</sup>だちで、家<sup>か</sup>ぞくのように なかよしです。

この アン<sup>あん</sup>テー<sup>てい</sup>ー<sup>い</sup>たちは、わたしの 本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>の しんせきでは

ないけれど、わたしが 生<sup>う</sup>まれた 時<sup>とき</sup>から、マ<sup>ま</sup>マ<sup>ま</sup>が みんなの

ことを アン<sup>あん</sup>テー<sup>てい</sup>ー<sup>い</sup>と よんでいたので、しぜん

そう よんで なかよく しています。

マ<sup>ま</sup>マ<sup>ま</sup>は、とても 明<sup>あか</sup>るくて だれとでも なかよく

なります。そして、いつでも だれにでも おなじように

話<sup>はな</sup>しかけたり、ハ<sup>は</sup>グ<sup>ぐ</sup>をしたり します。だから すこし

はずかしいなど 思<sup>おも</sup>ってしまう ことが あります。

ある日、車<sup>くるま</sup>いすを つかっている人<sup>ひと</sup>に

出<sup>で</sup>会<sup>あ</sup>いました。わたしは、どうしてよいか

わからずに もじもじ していました。



※ハ<sup>は</sup>グ<sup>ぐ</sup>・・・あいさつの かわりに あい手<sup>て</sup>を だきしめること

すると、ママはいつものようにその人にすぐにかけより、声をかけ、ハグをしました。わたしは、

「ええっ。なにしているの。そんなことをしたら

だめだよ。」と 思い、とめようと しました。でも ママは、

「へい！ 友だちよ。」

と わたしに 言いました。そのことばを 聞いて、わたしは、

はっと しました。それから わたしは たくさんの

アンティーたちを 思い出しました。

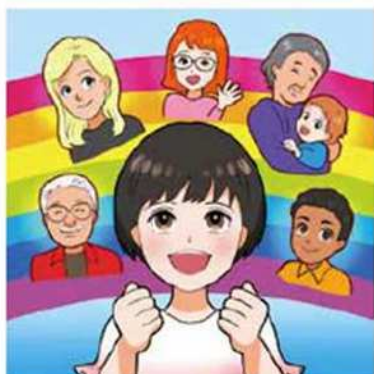
「そうだ。みんな友だち。そして 家ぞく だったな。」

自分とは ちがうから なかよくなれない かかわることは

できないと 思ってしまった。いました。

そうではなくて、自分とは ちがうからこそ、あい手を

知りたくなるし おたがいの すてきな ところに



気づくことが できること。そして、ちがっていても ちがいを  
みとめ合い ささえ合う ことが 大切だ ということを  
ママが 教えてくれました。  
わたしは、ママのハグを もういちど 見て みました。  
すると これまでよりも、もっと 心が あたたかく  
なりました。

# 3

みんなの ために

## 利右衛門さんの からいも

今から 三百二十年ほど前 山川（げんざいの 指宿市山川）に  
前田 利右衛門さん という わかものが いました。山川は  
おかしから 米や作もつが そだちにくい ところ だったので  
利右衛門さんたちは 「たくさん 食べて おなかいっぱい  
になりたい。」と いつも おなかを すかせて いました。

ある時 琉球に 出かけた 利右衛門さんは、  
見たことがない なえが はたけに たくさん  
うえられている ことに 気づきました。  
近くの人に この なえに ついて たずねると



【山川（指宿市）が あるところ】

※ からいも・・・さつまいも

※ 琉球・・・げんざいの沖縄県

名前は「からいも」と言い　どんな　ところでも　そだつことが  
分かりました。ゆでた　からいもを　食べた　利右衛門さんは、  
「ほくほくして　くりのような　あまい　あじがする。うんまか。  
うんまか。」

と　言いながら　ぺろりと　ぜんぶ　食べて　しまいました。

利右衛門さんは、「この　からいもは、おいしい上に　おなか  
いっぱいになる。からいもを　山川で　そだてよう。」と

思い、からいものなえを　一つ　もち帰りました。

山川に　帰った　利右衛門さんは、からいものなえに　毎日  
たっぷり　水をかけ、かれないように　大切に　そだてました。

からいもの　つるは、ぐんぐん　のびて　元気に　そだちましたが  
花は　なかなか　さかず　からいも　も　できませんでした。

「もしかしたら　山川では　からいもは　そだたないのかも



しれない。」と 心しんばいに なってきました。

あつい 夏なつが すぎて 秋あきになり やっと 花はなが さきました。

しかし、からいものはっぱと つるは だんだんと 元げん気が

なくなっていきました。「だいじに そだてたけれど どうとう

からいものは できなかった。なにが よく なかったのだらう。」と

利右衛門りえもんさんも 元げん気が ありません。「もう 思おもいきって

ひきぬこう。」そう思おもって 利右衛門りえもんさんは からいもの つるを

ね元もとから 力ちからいっぱい ひきぬきました。すると たくさんの

からいものが 土つちの 中なかから 出でてきたのです。利右衛門りえもんさんは

「あった。あった。からいものが あったぞ。」

と 大おおきな声こえで さけびました。 利右衛門りえもんさんは、

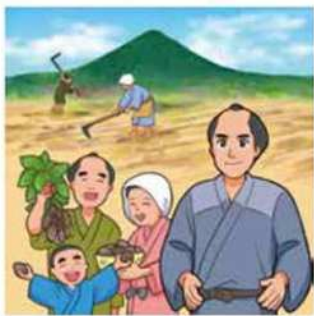
はじめて からいものを そだてたので からいものが

土つちの中なかに できることを 知しらなかったのです。



さっそく 家<sup>か</sup>ぞく<sup>で</sup> にて 食<sup>た</sup>べました。みんな え顔<sup>がお</sup>で  
よろこんで 食<sup>た</sup>べました。みんなの 顔<sup>かお</sup>を 見<sup>み</sup>て 利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>さん<sup>も</sup>  
うれしく なりました。来<sup>らい</sup>年<sup>ねん</sup>は もっと たくさんの からいもの  
なえを 作<sup>つく</sup>って 山<sup>やま</sup>川<sup>がわ</sup>の 人<sup>ひと</sup>たちにも 分<sup>わ</sup>けてあげよう。そして  
おいしい からいものを 食<sup>た</sup>べさせて あげようと  
利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>さん<sup>は</sup> 思<sup>おも</sup>いました。だから しゅうかくした  
からいものは、ぜんぶは 食<sup>た</sup>べず なえを 作<sup>つく</sup>るために 大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>に  
とっておきました。

利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>さん<sup>は</sup>、いろいろ ためして、たくさんの  
作<sup>つく</sup>ることに せいこうしました。そして、できた  
なえを きんじょの 人<sup>ひと</sup>に くばり、そだてかたも  
ていねいに 教<sup>おし</sup>えて 回<sup>まわ</sup>りました。にても、  
やいても おいしい からいものは、みんなに





大<sup>たい</sup>へん よろこばれ、遠<sup>とお</sup>くからも なえがほしいと 人<sup>ひと</sup>びとが やってきました。

利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>門<sup>もん</sup>さんの おかげで、山<sup>やま</sup>川<sup>がわ</sup>では、からいも ばたけが どんどん 広<sup>ひろ</sup>がって いきました。いちめんに 広<sup>ひろ</sup>がった からいもばたけを、利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>門<sup>もん</sup>さんは うれしそうに 見<sup>み</sup>つめて いました。

山<sup>やま</sup>川<sup>がわ</sup>では からいもを そだてるように なってから 食<sup>た</sup>べものに こまることは ほとんど なくなりました。 村<sup>むら</sup>の人<sup>ひと</sup>びとは 利<sup>り</sup>右<sup>え</sup>衛<sup>もん</sup>門<sup>もん</sup>さんに 心<sup>こころ</sup>から かんしゃしました。



やまがわ はたけ ひろ  
【げんざいも 山川の畑に広がる からいも畑】



りえもん  
【利右衛門さんが まつられている 徳光神社】



りえもん なまえ かい せき どっこうじんじや  
【利右衛門さんの 名前が 書かれた石ひ (徳光神社)】

# 4

あい手の 気もちを 考えて

## たすけられた むごうじん

みなさんは、西郷隆盛さんを知っていますか。

これは、西郷さんが さつまの おとのさまを

おこらせてしまい 沖永良部島に つれて

行かれた時の お話です。

沖永良部島で 西郷さんが 入るろうやは

せまくて かべも ありませんでした。食じも

昼と夜だけで、たいた ごはんにおゆをかける

とても そまつな ものでした。

西郷さんのおせわをしていた 土持政照さんは

「このままでは、西郷さんが びょう気に



さいごうたかもり  
【西郷隆盛さんが すごした ろうやの ようす



わどまりちょう さいごうなんしゅうきねんかん  
(和泊町 西郷南洲記念館)】

なってしまう。」と 考え、ごちそうを つくらせて

出しました。しかし そのたびに 西郷さんは、

「お気もちだけ ちようだい いたします。」

と 言って、食<sup>た</sup>べることは ありませんでした。西郷さんが、

ろうやの 中<sup>なか</sup>で 日<sup>ひ</sup>に日<sup>ひ</sup>に やせ おとろえるのを 見<sup>み</sup>た

土持さんは、このままでは 西郷さんは

死<sup>し</sup>んでしまうと 思<sup>おも</sup>い、いそいで だいかんに

会<sup>あ</sup>いに 行<sup>い</sup>きました。

「おねがいがあります。とのさまからの

めいれい書<sup>しょ</sup>には 西郷さんを かこいの中<sup>なか</sup>に

入<sup>い</sup>れよと 書<sup>か</sup>いて あります。家<sup>いえ</sup>の中<sup>なか</sup>に

つくった ざしきろうが かこいです。そこに



※ だいかん・・・そこにすむ 人<sup>ひと</sup>びとの 生活<sup>せいかつ</sup>を よりよくする人<sup>ひと</sup>

※ ざしきろう・・・いえの中<sup>なか</sup>に ある ろうや

西郷さんを うつしてください。今のままでは 西郷さんは  
死んで しまいます。どうか 西郷さんの いのちを  
おたすけください。」

すると、だいかんは、しばらく じっと 考えてから

「ううむ。わかった。よく 気がついて くれた。家の中の  
ざしきろうに 西郷さんを うつしなさい。」

と 言いました。

土持さんは 大よろこびで 西郷さんの ところへ つたえに  
行きました。

「西郷さん、家の中の ざしきろうに、おうつりに なること  
になりました。ざしきろうが できあがるまでは このろうやを  
出て わたしの 家で ゆっくり おすごしください。」  
すると、西郷さんは、大つぶの なみだを ながしながら、





土持つちもちさんの話はなしをきいていました。そして、  
こう言いいました。

「土持つちもちさん 本当ほんとうにありがとうございます。

わたしは このろうやの中なかで いつか

死ぬしだろうと思おもって おりました。」

二人ふたりは ろうやの中なかと 外そとから 手てを かたく

にぎりしめ ないて よろこび 合あいました。

西郷さいこうさんは、ざしきろうが できる までの間あいだ、土持つちもちさんの

家いえで すごし 土持つちもちさんのお母かあさんが つくった おいしくて

えいよう たっぷりな ごちそうを いただき おふるにも

入はいらせて もらい ました。

土持つちもちさんは、ざしきろうを つくる 大工だいくさんに

「ゆっくりで いいから。一日いちにち分の しごとを 三日みっかぐらいに

分けて しあげる ように。」

と言いました。

しばらくして ざしきろうが できあがりました。

「土持さん このざしきろうは まるで ごてんの ようだ。

わたしには もったいない くらいです。ありがとうございます

ございます。」

西郷さんは、 なんども なんども おれいを 言って

ざしきろうへ 入って 行きました。

西郷さんにとつて、土持さんは いのちの おんじんであり

かけがえのない そんざいに なりました。

※ ごてん・・・とのさま などが すむ ごうかな 家

5

くじけな心で

くるくちをのりこ



つるたよしゆき せき かごしまし  
【鶴田義行さんの どうぞうと 石ひ(鹿児島市)】

鹿児島市の伊敷というところに上の  
しゃしんのようなどうぞうが たって  
います。そのとなりの石ひにはこんな  
ことばが のこされて います。

くる 苦しい うち は ダメ  
たんれんぶそく 鍛錬不足の 証拠  
くる 苦しさに 慣れ 平気になつて  
ほんとう 本当の 苦しさを 探究が 始まる

【いみ】

くるしいと 思っている うち は まだ どか しているとは 言えない。れんしゅうを  
かさねて、くるしさに なれて、さらに 高い 目ひようへ むかつて いくことが 大切です。

みなさんは この人が だれか 知っていますか。

この人は、鶴田義行さん。オリンピックで 日本で はじめて

二大会れんぞく 金メダルを かくとくした

水えいせん手です。一回目の 金メダルを かくとくした

一九二八年の アムステルダムオリンピックでは

二〇〇メートル ひらおよぎに 出場し オリンピック

新記ろく（二分四十八秒八）を だしました。この

オリンピックで まさか 日本人が ゆうしょう するとは

まわりの だれもが 思って いま せん でした。鶴田さんの

名前は いっきに せかいに 広まって いきました。

そして 四年後の ロサンゼルスオリンピックでも

鶴田さんは 二〇〇メートル ひらおよぎに 出場し

金メダルを かくとく しました。その時の 記ろくは

※ アムステルダム・・・オランダの しゅと

※ ロサンゼルス・・・アメリカの 大きな と市

二分四十五秒四で、にふんよんじゅうごびょうよん 前のまえ オリンピックのおりんぴっく 時よりとき 三秒四もさんびょうよん  
はやく二回にかいめ目のきんめだる 金メダルをかくとくしました。  
このろさんぜるすおりんびっく ロサンゼルスオリンピックでにほんちーむ 日本チームは  
六しゅ目もくのうちじゅうに 十二このめだる メダルをとり  
「水すいえい王国おうこく 日本にほん」とい 言われるように なりました。  
そして 鶴田つるたさんに あこがれ 水すいえいせんしゅを めざす  
子どもたちこが たくさん あらわれる ように なりました。  
そんなだい 大だいきろくを もつ 鶴田つるたさん ですが、 けっして  
はじめから およぎが 上手じょうずだった わけでは ありません。  
子どもこのころ 鶴田つるたさんは 家いえの前まえを ながれる 甲突川こうつきがわで  
きょうだいや なかまと よく あそんで いました。ある 夏なつの  
あつひ日ひ。鶴田つるたさんは その川かわで おぼれそうになって  
しまいました。そのころは まだ およぐことが

※ 甲突川こうつきがわ・・・鹿児島市かごしましを ながれる 川かわ

できなかったのです。

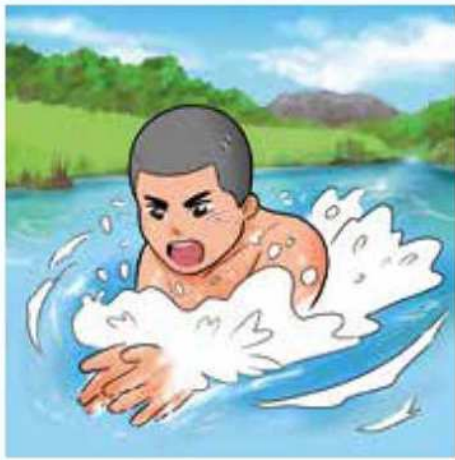
まけずぎらいの 鶴田<sup>つるた</sup>さんは それから およぎの

れんしゅうを はじめました。もちろん はじめは ほとんど

前<sup>まえ</sup>に すすむことが できません。

「くるしいなあ。でも くるしいのは れんしゅうが たりない  
しょうこ。まだ まだ がんばるぞ。」

そうして 何<sup>なん</sup>ども 何<sup>なん</sup>ども およぎつつけて  
だんだんと およぐことが できるようになっ  
てきました。それどころか なかまたちが  
川<sup>かわ</sup>の ながれに そって およいでいる中<sup>なか</sup>、  
そのながれに さからって 一人<sup>ひとり</sup> 上りゅうへ  
上りゅうへと およいでいく すがたも



見<sup>み</sup>られるようにな  
りました。

※ 上りゅう・・・川<sup>かわ</sup>のながれの 上<sup>うへ</sup>の方<sup>ほう</sup>



おとな

大人になり

はたらくように

なってからも

つるた

鶴田さんは

じかん

時間を

み

見つけ

きんこうわん

錦江湾で

およぎの

れんしゅうを

およぎの

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

れんしゅうを

しました。そのころには

かごしま

鹿児島と

さくらじま

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

桜島までの

おうふく

はちきろめーとる

ハキロメートルを

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

ゆうゆうと

およげるようになっていた そうです。

この

こ

子どもの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

ころからの

くるしさを

のりこえた

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

けいけんが

おりんびっく

の

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

金メダルに

つながって いったのです。



おりんびっく しゅつ とき つるたよしゆき  
【オリンピックに 出しようした時の 鶴田義行さん】

※ おうふく・・・行って かえってくる こと

# 6

ふるちよきを 思う 気もち

人を 思い ぶるちよきを 思う

白い すなはまに うちよせる なみの 音。

海を わたる そよ風。

おじいさんになった 八島太郎さんは、遠く アメリカの

地で 大すきな ふるさを 思い出して いました。おさない

ころに 自分に たくさんの ことを 教えて くれた 山や海、

川や木、鳥や虫たち、いろいろな しごとを している 大人たち。

その どれもが 生き生きとした うつくしい ものでした。

八島さんが、生まれたのは げんぎいの 南大隅町の

根占です。八島さんは ゆたかな 自ぜんや 友だちと すごす

時間<sup>じかん</sup>が 大<sup>だい</sup>好きでした。

大人<sup>おとな</sup>に なった 八島<sup>やしま</sup>さんは 画家<sup>が</sup>となり

絵<sup>え</sup>の べんきょうを したいと 思<sup>おも</sup>って

アメリ<sup>あめり</sup>カへ わたりました。

アメリ<sup>あめり</sup>カでの 生活<sup>せいかつ</sup>は 苦<sup>くる</sup>しい ものでした。

しかし たくさんの 人<sup>ひと</sup>に よろこんで

もらえる 絵<sup>え</sup>を かくために

いっしょうけんめいに 絵<sup>え</sup>の べん強<sup>きょう</sup>を

がんばりました。

ちようど そのころ、日本<sup>にほん</sup>と アメリ<sup>あめり</sup>カが

せんそうを はじめました。せんそうは しいに はげしくなり

たくさんの 人<sup>ひと</sup>が なくなりました。八島<sup>やしま</sup>さんが、ふるさとや

友<sup>とも</sup>だちを 思<sup>おも</sup>わない 日<sup>ひ</sup>は ありませんでした。八島<sup>やしま</sup>さんは、



ね じめみなみおおすみちよう  
【根占（南大隅町）が あるところ】

「いのちを だいじに してほしい。生きてほしい。」ひと人と ひと人が  
いのちを うばいあう ことは ぜったいに あってはならない。」  
と 平和へいわへの つよい 思いおもいを 絵えにかいて 日本にほんへ  
とどけました。

かなしみに つつまれた せんそうが やっと おわりました。  
八島やしまさんの ふるさとの 根占ねじめも せんそうの ひがいを  
うけました。せんそうの ために 大切たいせつにしていた 自しぜんや  
友ともだちも うしなって しまいました。八島やしまさんの 心こころも  
大きな かなしみに つつまれました。

その後、八島やしまさんは、ふるさどで すごした 日ひびを えがいた  
絵えや絵本えほんを かきました。

友ともだちと わらいあった 日ひび、心こころの ささえとなる  
人ひととの つながり、大切たいせつに してきた 思いおもいや ねがい などを

いくつもの 作<sup>さく</sup>ひんに こめたのです。これからの みらいを  
生きる 子<sup>こ</sup>どもたちのために。今<sup>いま</sup>を 大<sup>たい</sup>切<sup>せつ</sup>に してほしいと。

八<sup>や</sup>島<sup>しま</sup>さんが かいた さいごの 絵<sup>え</sup>本<sup>ほん</sup>作<sup>さく</sup>ひん「海<sup>かい</sup>浜<sup>ひん</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>がたり</sup>」は  
つぎの ように はじまります。

日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>の 南<sup>みなみ</sup>の はしの しまに、 遠<sup>とお</sup>く  
はなれて、と会<sup>かい</sup>の もの音<sup>おと</sup>が まったく  
とどかない 海<sup>かい</sup>浜<sup>ひん</sup>が ありました。  
おかしながらの しずけさが、 ずっと  
そのまま、 そこに ありました。



かいひんものがたり たい ふきあげはまひおきし  
【「海<sup>かい</sup>浜<sup>ひん</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>がたり</sup>」の ぶ台である 吹上<sup>ふきあげ</sup>浜<sup>ひん</sup>(日置<sup>ひき</sup>市<sup>し</sup>)】

※ 海<sup>かい</sup>浜<sup>ひん</sup>・・・ すなはま

アメリカにいた  
いたのはふるさと  
今をいっしょうけんめいに生きる大切な人びと  
鹿児島のうつくしいすがたと  
でした。

八島さんは、ふるさとの根占で  
すごした日びをえがいた  
作ひんを かいています。  
『からす たろう』・『村の樹』・  
『道草いっぱい』・『海浜物語』  
など、八島さんの少年時代いの  
思い出や ふるさとへの 思いが  
つたわる 作ひんです。  
ぜひ、読んでみてください。

【八島太郎さんが えがいた作品  
『からす たろう』】(偕成社)

からす たろう



やしま たろう



【子どもたちにかこまれる画家・絵本作家  
八島太郎さん(本名 岩松 淳さん)】  
((株) 創風社)



かごしまけんりつはくぶつかんに ある きょうりゅうかせきです。  
この かせきの後ろに ある 大きな絵も 八島さんが えがきました。  
子どもが 大すきだった八島さんが、鹿児島の 子どもたちに  
見てほしいと 思いを こめて えがきました。  
かせきとともに きょうりゅうたちが 生きていた はくりよくある  
時だいが わかる とても きちょうな ものです。

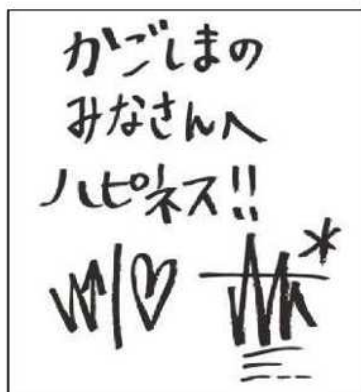


## みなさんへのメッセージ



あい  
【AIさん】

今、わたしはお母さんが言っていた  
「みんな友だち」ということが、とてもすてきだと思っ  
ています。「ちがうことが、いけないのかな。」  
「みんな おなじ なのではないのかな。」  
「もともと、みんなを くべつしなくても  
いいのでは ないかな。」 そう思っ ています。  
どこに すんでいても、どんな ことを  
話しても、みんなに 楽しく いてほしい、元気で  
あつてほしい。歌っている 歌にも その思いを  
こめています。そして、その 思いが せかい中の  
みんなにとどく ことが わたしの ねがいです。



かみしらいし も か  
【上白石萌歌さん】

人との ごえんや ごおんを 大切に してください。小さいころに 見た  
けしきや 体けん、友だちと けんかしたことなどは 自分を つくる もとに  
なります。いろいろな ことを 一ばん キヤッチ できる じきだと  
まい日、朝おきて 学校に 行く だけでも すばらしい ことです。  
まい日 いろいろな ことを かんじながら すごしてください。



かみしらいし も ね  
【上白石萌音さん】

あい手が どんな気もちで いるか、これを 言ったら どういう 気もちに  
なるか そうぞう力を もって 生活してください。  
うれしいことや かなしいことは 大人に なって 自分をたすけて くれます。  
とくに かなしいことや つらいことを けいけんすると やさしく なれます。  
心が うごくことは しあわせな ことです。心を うごかすことを 大じに  
してください。

## 保護者の皆様へ

この本は、鹿児島県の子供たちのために作成した道徳の教材です。子供たちが、この本に登場する人物の考え方や生き方にふれ、自分の生き方について考えを深め、夢や希望をもって過ごしてもらえることを願って作成しました。ぜひ、この教材と一緒に読んでいただき、お子さんと思ったことや考えたことを話し合ってみてください。また、さらに知りたい、深めたい場合には下に記載している【参考・引用文献】も紹介してみてください。

### 【参考・引用文献】(順不同)

#### □前田 利右衛門

- 「かごしま文庫9 さつまいも 伝来と文化」(春苑堂 1994 年)
- 「令和 5 年度企画展図録 指宿まるごと博物館 X IV 海が織りなす焼酎文化 ～芋・技・肴・器～」(指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ)
- 「甘藷翁物語」(三州談義社 1966 年)

#### □西郷 隆盛・土持 政照

- 「西郷隆盛と沖永良部島」(和泊万郷南洲顕彰会 2011 年) 郷土の先人(土持 政照)」(和泊町教育委員会)
- 「えらぶの西郷さん」(和泊西郷南洲顕彰会 1988 年)

#### □鶴田 義行

- 「(財)日本オリンピック委員会監修『近代オリンピック 100 年の歩み』(ベースボール・マガジン社 1994 年)
- 「南日本新聞社編『郷土の人系 中巻』(春苑堂 1969 年)「知ってるつもり」(日本テレビ 1992 年)
- 「郷土教育 第 6 号」(鹿児島県総合教育センター指導資料 2021 年)
- 「文藝春秋 第 98 巻第 1 号」(文藝春秋 2020 年)
- 「オリンピックを通してつかんだ水泳の心」(鹿児島県総合教育センター読み物教材 2021 年)
- 「南日本新聞「かごしま 20 世紀」河こえて」(南日本新聞社 1999 年)
- 「伊敷地域ガイドマップ」(伊敷地域まちづくりワークショップ 出版年不明)
- 「日本の金メダリスト事典 1 夏季オリンピック・冬季オリンピック編」(ベースボール・マガジン社 2018 年)
- 「失敗図鑑 偉人・いきもの・発明品の汗と涙の失敗を集めた図鑑」(いろは出版 2018 年)

#### □八島 太郎

- 「八島太郎・日米のはざまに生きた両家」(創風社 2008 年)

### 【協力】(敬称略、順不同)

東宝芸能(株)／株式会社 ザ・マイカホリックス／指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ／  
西郷南洲記念館／西郷南洲顕彰館／和泊町教育委員会／和泊町立和泊小学校／南大隅町教育委員会

貞竹 山子／山田 みほ子／假屋園 昭彦／島津 公保／下豊留 佳奈／野間 友見／永里 智広／  
山下 久美子／泉 宗弘／山口 親悟／長瀬 誠／前畑 あさよ／塩満 貞徳／所崎 陽／池来須 隆子／  
坂口 洋幸／安樂 朋陽／梶 千明／諸平 幸奈／西原 真琴／西村 優子／毛利 秀喜／富吉 祐輔

学習内容一覧			
	主題名	教材名	内容項目
1	かんしゃの 気持ち	わたしたちの 家ぞく	B 感謝
2	ちがっていても なかよく	ママが 教えてくれたこと	C 公正、公平、社会正義
3	みんなの ために	利右衛門さんの からいも	C 勤労、公共の精神
4	あい手の 気持ちを 考えて	たすけられた さいごうさん	B 親切、思いやり
5	くじけない 心で	くるしさを のりこえて	A 希望と勇気、努力と強い意志
6	ふるさとを 思う 気持ち	人を 思い ふるさとを 思う	C 伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度

「読み物資料」～1・2年生用～  
令和7年2月発行  
編集・発行 鹿児島県教育委員会  
〒890 8577 鹿児島市鴨池新川 10 番 1 号

この本の副タイトルについて

副タイトルを「今日、どの先人？（きょう、どのせんじん？）」としました。

その理由は、以前、私たちが作成した「郷土の先人（きょうどのせんじん）」の続編（4作目）であるからです。

また、これまでの教材を含めて「今日は誰の話を読もうかな」と前向きに思っしてほしいという願いも込めています。